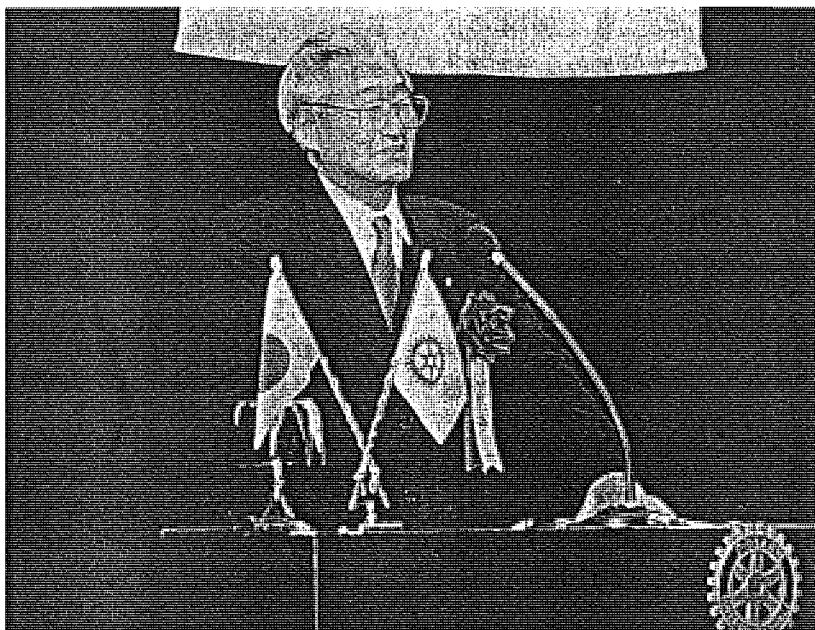


第一部 基 調 講 演

テーマ 「ロータリーを知ろう」

講 師 秋山 一 パストガバナー



(司 会) ありがとうございます。それでは、これより基調講演の準備をいたしますので、少々お時間をいただきます。

(間) 皆様、お待たせいたしました。これより秋山パストガバナーにタイトル、「ロータリーを知ろう」と題し、基調講演をお願いいたします。福永実行委員長より講師の紹介をお願いいたします。

(福 永) 講師のご紹介を申し上げます。と申しましても、秋山パストガバナーは私より皆様方のほうがよくご存じではないかと思いますが、お役目でございますので、ご紹介申し上げます。

更に、皆様方のお手元に、インターシティ・ミーティングのご案内を申し上げた中に、詳しくご経歴を書いておりますので、これをご覧いただきたいと思っております。それでは、ご紹介申し上げます。

秋山パストガバナーは、昭和22年9月に早稲田大学政経学部をご卒業され、日本経済新聞社にご勤務の後、昭和36年12月に秋山ビルディング株式会社を創立されまして、国際的に経営をされております。

現在も日本経済新聞の社友でございます。特に、私が申し上げたいのは、桜田クラブアジア総合研究所の理事長さんであるということでございます。

このクラブは、秋山パストガバナーの父君がアジアの発展と親善、一体化を目指して創立されました桜田倶楽部を桜田クラブアジア総合研究所として再建されたものでございまして、中国との国交、親善のための国際奉仕として高く評価されているクラブでございます。

ロータリー関係につきましては、1968年東京調布ロータリークラブに入会されまして、1990年、91年度のR I 2750地区、私どもの地

区の地区ガバナーをお務めになりました。現在は、ロータリーの友の委員長さんでございます。

更に、皆さんご存じだと思いますが、R Iのアジア・太平洋地域メディア・リエゾンをお務めになっております。これは1997年の1月号のロータリーの友に2頁にわたって詳しく載っておりますので、皆様方もご覧になったと思いますが、これは、現在のロータリーのメディアとロータリーの情報との接点で、ロータリー情報の受・発信の日本の責任者ということでございます。

また、本年度は、昨年11月に2740地区の、佐賀、長崎地区のR I会長代理もお務めになっております。本日は、最新のロータリー情報と、ロータリーの真髓についてお話を伺うことができるものとして期待しております。どうぞ、ご静聴のほどお願いいたします。

(拍手)

(秋山パストガバナー) 本日は「今日のロータリーを知ろう」という課題で貴重な時間を、基調講演にご指名戴きましたことを光栄に存じます。

1990-91年ガバナーをやったあとは、地区の諮問委員・情報カウンセラー・拡大カウンセラー・財務委員長・バギオ基金委員長・ロータリーの友副委員長・1995年カラカス規定審議委員会代表議員等をつとめ、現在は地区諮問委員・指名委員長・地区組織検討委員会委員長・ロータリーの友委員長、それにR Iのアジア地域の広報メディア担当役員を努めております。

色々なお役をやることによって、ロータリーの事を知れば知るほど「人生上の何か大切なもの」を教えて頂いているような気が致します。

毎年7月1日の日本全国のパストガバナー・ガバナー・ミニの集りは、新旧ガバナー交替の挨拶と、R I情報の報告がなされます。

12月には日本の第1～4ゾーンのロータリー研究会が2日間にわたり理事主催で行われ、パネルディスカッションやオープンフォーラムが開催され、みっちり勉強させられます。

情報を得ようとさえすれば十分な機会が用意されていることは「ロータリーを知ろう」とするものにとっては大変有り難いことであり、先輩パストガバナー達のなかなか激しい討論も聞けます。

この席にはR I会長・R Iエレクト・財団委員長(パストR I会長)その他R I幹部の方も来られ、それぞれのご意見も聞かれ、大変勉強になる会であります。私は分区の皆様方から押されて、ガバナーをつとめさせていただいた経験のお陰でこのような大切な情報を得ることが出来るのでありますから、その情報を皆様にお伝えするのが私の義務であると思うのですが、なかなかそういうチャンスは少ないものです。

たまたま本日の課題が「ロータリーを知ろう」という題でありますので、私の宿題を果たすつもりでお話を申し上げたいと思います。

特に、当今、「ロータリーをより深く知らねばならぬ」ということが非常に重要になっていると思います。1人1人のロータリアンが、ロータリーのことをよく考え情報を良く知り、そして誤りのない方向を見いだして行かなければならないということ、そして、しっかりしたロータリーの将来に対する考え方を皆が持つておく必要性、重要性を痛感するのであります。

今、我々のロータリー世界の中では、非常に大きなニーズの変化、そしてそれへの対応のための新しい情報が次から次へと押し寄せられており、R Iからガバナーを通じてのいろいろなプログラムのメニューが極めて多岐にわたっております。まさに新しい世紀に向けての重要な岐路に立っている時であることを痛感します。

最近、「ロータリーは変わった、変わりつつある」と慨嘆的に言われる言葉をよく聞くのは私だけではないと思います。しかし、嘆いているだけでは何にもならないのでありまして、この重要な時期に1人1人のロータリアンがしっかりしたロータリーに対する知識と先見の眼を持ち、これからの目標をしっかりと見定めなければならぬ時ではないかと思えます。

私の知人のあるロータリアンがこんなことを申しました。「空を覆って数知れぬ飛行機が夜空に満天の星の如く飛んでいる。それはまさに壮観であった。ところが空が明るくなって良く見ると、何とそれは巨大な飛行機に引張られて飛んでいるグライダーの群れであった。」こんな例が今の世界のロータリーに通用するようでは大変なことでもあります。

1つ1つの飛行機にはそれぞれに推進力であるエンジンと自ら飛んで行く目標を定め、常に方位を図って舵をとる能力を持っていないければなりません。決して引曳されているグライダーであってはならない。

1つ1つのロータリークラブが立派な独立体としてロータリーの奉仕の理想に向かい、その時、その場所、気象状況に応じた舵取りを行い、自らの方向を決め得る能力と見識力を持っているものでなければならないという例えであります。

それぞれのクラブこそロータリー世界で唯一の権威であり、奉仕を目指す独立した単位でなければなりません。そしてそれが同じ志を持つ者達が集まって共に全世界を覆う大編隊でなければならないのであります。

1つ1つのクラブが自らの道を定める指導力と推進力を持たなければということは、現在のロータリーにとって大きな示唆を与えるものではないかと思えます。

そのクラブの構成員たるロータリアンの知識を高め、奉仕の理想と他人への暖かい思いやりの心を養う人生道場としてクラブへの出

席を重ねるのであります。人づくりの場がロータリークラブでなければなりません。だからロータリークラブには自ずと奉仕の心を学ぶ教育的雰囲気が備わっていなければならないこととなります。

ロータリーをより深く知り、その情報を肥しとしてロータリーの心を高めることこそが、ロータリー運動の国際推進、人類への貢献を高める所以であるということを確認合わなければならない時であります。

“ロータリーよ何処へ行く”と嘆くのではなく、その1人1人のロータリアン、クラブがはっきりとした将来への展望を掴むことこそ、ロータリーの明日への道を開くものであると痛感致すものであります。

クラブこそその地域におけるロータリーの唯一の独立した権威であり、そのクラブが直接国際ロータリーに加盟しているのであります。R Iへの加盟はロータリー個人個人でもなければ、地区を通じて加盟しているのでもありません。ヒューアーチャーという方は、1989～1990年のR I会長であります。私がガバナーをした前の年の会長でありました。

国際協議会に出席した私どもガバナー・ミニはヒューアーチャー会長にお目に掛かり、お話を伺うチャンスを得ました。その時、彼は旧ソビエト連邦地域にロータリーをつくるため、ロシア政府と最終的つめを行った話を致しました。

その時R Iとして5つの絶対的条件を政府に求めました。これが決着がついて初めて旧ソビエト連邦にロータリーの拡大が行われ、ロシアはロータリー国になったのであります。地域的關係から、フィンランドがホストをつとめました。

その5つの絶対的条件とは、

1. ロータリークラブの人事に政府その他、いかなる者も干渉しないこと。
2. クラブ内の言動を探索しないこと。
3. 集会の安全と自由を保証すること。

4. クラブ及び他地域への拡大を制限しないこと。

5. 国際ロータリーへの送金の自由を確保すること。

であります。これがクラブ独立の原則であります。いかなる者もこのクラブの権威をおかすことはできません。

ただ国際ロータリーの一員たるための最低の規約、即ち手続き要覧に記載されていることを守ることであります。但し、出席等その規約より厳しい規約を決めることは自由であり、あくまでもクラブ定款はR Iが強制でなく推奨する規約となっているのであります。これがロータリークラブの保証された権威であります。

S A Aはその神聖なるクラブの権威を侵されることなきよう、その会場を監督する基本的使命がある訳であります。

そこで手続き要覧のことでありますが、この手続き要覧、つまりR I定款・R I細規・標準クラブ定款・推奨クラブ細規等は、その表題の示す如くそれぞれのクラブで、ある程度の常識的巾が許されているものであります。これは緩める方の中ではなく厳しい巾の方であります。

規定審議会はR Iの管理組織である地区から選ばれた1名の代議員によって構成される3年に1度開催されるロータリーの立法議会であります。これによって民主的にそれぞれのクラブの意向も反映することができる訳です。

規定審議会では、R I定款は3分の2以上の賛成、その他のものは2分の1以上の賛成を要し、ロバーツ・ルールによって議事が進行されます。私は1995年規定審議会に代議員として出席し、今年のニューデリー審議会には矢野パストガバナーが代議員として出席しました。ここで可決されたものは、各クラブに通知されます。もうそろそろ着いている頃だと思えます。その可決されたものは、もう

一度各クラブの賛否のスクリーンにかけられ、反対が全クラブの1割以上に達した時には保留になり、次の国際大会において再検討されます。

これ程クラブの権威を尊重しているのであり、自ら決めた自らを規制する規約であります。手続き要覧を振りかざして、常に議論を吹っ掛ける人が各クラブに必ず2~3人はいるはずですが、この方々は、とかくうさगरられていますが、是非大事にして戴きたいと思えます。

私の知人でゴルフ仲間の一人にミスター・ルールブックとあだ名されている人がいます。彼はいまでも口経、産経新聞にゴルフのルールのことを書いています。結構読まれているそうです。彼と一緒に回ることを非常に面白いと言う人と、真っ平ごめんだという人と両派に分かれるものです。ゴルフは楽しむものだ、理屈じゃない。何回で向こうの穴にボールを入れるか、夢中になって大の大人が競い合うのだから理屈などいらぬという人もいます。

かのルールブック氏に言わせればこのルールの中にこそ、ゴルフの文化の偉大さ、そのゴルフというスポーツを生み育てた社会の文化の高さが分かるのだというのであります。そして彼は「クラブによってはこのルールの勉強会を開いているクラブもある。うちのクラブは私がちょっと言うと煙たがって嫌がられる。だから私はあまり言わないことに努めている。」というのであります。

こんなことがありました。その日は強風で、パットでさえフォローとアゲインストを意識しなければならない程でありました。そんな時私のショートアプローチがホールへのりで止まってしまいました。入れ入れと叫びながらその時ばかりはもっと強く風よ吹けと願ったものであります。そしてボールの横に佇むこと数呼吸、漸く諦めてボールを1打重ねて入れました。その時、火が付いたようにルー

ルブック先生の講義が始まったのであります。「秋山さん、ちゃんとルールブックにはこう言うときの規定が定められているのです。」彼は少し甲高くなった声で喋り始めました。「あなたは追い風だったからなるべく時間をかけてボールの所まで行き、アドレスしたあと時間を置きましたね。さほど気になる程ではなかったけれど、これもちゃんと規定があるのです。」「へー、何分何秒とか規定があるのですか?」と私は問い直しました。すると「そうなんです。パターのアドレスをしてから10秒以内はいいということになっていますが、11秒になったらペナルティですよ。(基準には10秒以内と書いてありますが)そして、ボールのところまで歩いて行く速度については、通常の歩速でボールのよこに立ち、アドレスをしてから10秒でパットをしなければならぬとあるのです。

つまり、風よ吹け、風の方でボールが入れと、わざと遅く歩いたりしてはいけないのです。しかし、何がその人の通常の歩速なのか、それはプレーヤー自身の良心に任せているのであります。つまり、ゴルフは紳士のスポーツで、フェアプレーの精神が基になっております。紳士とは決して卑怯な真似はしない人というのが、このスポーツの前提になります。ルールブック氏は更に言葉を続けました。日本のあるプレーヤーが国際戦でボールが人工物の上に止まり、1クラブレングスのリプレースが許されることになりました。彼は、長いクラブで距離をはかりドロップして、打つときにはアイアンでそのボールを打ちました。これはその距離を計った時のクラブで打つつもりであったが、いよいよ打つ段になって、ドロップした場所の具合で短いクラブに持ち替えたのか、わざと長いクラブで計ったのかによって、ペナルティになるかならないかですが、そのことはプレーヤー自身の胸の中にしかありません。

こういうことが1度ならず重ねれば、彼は

ゴルフをするにたらない人として印象付けられてしまうのであります。フェアプレーというそのゴルフの基本精神は、そのままその国やその競技の基本精神なのであります。」とルールブック氏の話は終わった。私はその間、その言葉をそのまま「4つのテスト」や「service above self」や「職業の倫理訓」や「23の34」などを思い出しながら、ロータリーの精神と重ね合わせていました。

その話は、プレーが終わるまで私の脳裏を離れず、お陰で散々なスコアになってしまいましたが、まさにロータリーはその生まれた風土に根付いた文化の産物であり、それを取り入れたそれぞれの国の風土や精神文明に十分適合したかたちで運営され受け入れられるべきものであります。そういう寛容さがあったればこそロータリーは国を越え、地域を越えて広がり、共通の理想として奉仕の心を共有することが出来たのです。その方法論や細かい解釈の違いなどは、それぞれの国の文化に応じて相違があってもよいものであります。そういうことにこそロータリーの寛容の精神が尊ばれる所以なのであります。

そして人類愛、人間らしい心、暖かい思いやりの心、相手の立場に立って考える心、こうした人類共通の美德が、それぞれの国の文化・習慣にそって育ててこそ、ロータリーが世界的に繁栄するのであります。

さて、ロータリーをより深く知るということは、1人1人のロータリアンがクラブの例会を通じて多くの奉仕に関する情報を得、考えを述べ合い、切磋琢磨してその質を高めて行くことであります。奉仕の心を体得することです。そしてクラブ会員を奉仕の実践に導く者として、ロータリークラブがあります。だからクラブは教育的雰囲気が必要であります。ロータリー情報の奉仕活動とは、会員に対してロータリー知識と理解を広げるような情報を伝えるように、各例会のプログラムが組まれていなければなりません。例会

のはじめに3分とか5分という時間を情報に当てるのが極めて重要であるということが手続要覧に示してあります。単にクラブ内部の連絡事項のお知らせということではないのでありまして、各クラブのロータリー情報委員会は、特に新会員がロータリーを十分理解し、ロータリー会員の特徵と責務を把握できるよう援助することにも力を注がなければならぬとされておりまして。

そして、“年間を通じて少なくとも毎月1回は、奉仕の4つの部門それぞれについてロータリアン個人の知識と行動を増幅するようなプログラムを提供しなければならない”と記されているのであります。

R Iから発行される多くの情報に関する教育プログラムの資料、各クラブに送られる世界の奉仕活動の情報誌である〔ロータリーワールド〕、そしてロータリアン誌または公式ロータリー地域雑誌である〔ロータリーの友〕の講読、ロータリーに精通したロータリアンの話し、各テーブルに配置された経験豊富なロータリアンとの会話、等を通じて常に教育的雰囲気やロータリークラブ内に持つことが肝要であります。

そう言えばすぐ年寄りの癖というか、昔はこうだったという言葉が出るのはお年のせいだと言われますが、敢えて昔はこうだったという話をしますと、私どもも古いロータリアンに何かと情報を与えられました。

私が入会した時、S A Aのタスキを掛けた人がまず受付に立って我々を迎えてくれましたが、挨拶の後「遅いじゃないの」と声を掛けられました。「いえ、まだ例会5分前ですよ」と新会員の私が申しましたところ、「新会員は20～30分前に来て、古い会員からいろいろ話を聞くことが大切なんですよ。あそこのテーブルに座っている〇〇さんの所にいきましょう。」と言って引っ張って行き、「今度新しく入られた〇〇さんです。」という調子でした。

自分からテーブルの上にあるお茶をサービスしながら、いろいろロータリーのことを話してくれました。そのような指導者がどこのクラブにも必ずいるものです。我々が教育好きな人だと思ってもみなかった人に新会員の教育を頼んでみると、想像もできない程面倒を見てくれることもあります。頼んでみることで。人は見かけによらないものです。

例会中の卓話の始まる前にS A Aが「御用のため止むを得ず途中でお帰りの方は、予め私にお教え下さい。」と言ひ、2, 3の人が手を挙げますと、後ろの目立たないところに席を移された情景を見たこともあります。卓話中私語の多いところに“静粛をお願いします”と書いた札を渡したり、またビジターの時にはその横に座っている紹介者にそのカードを渡したり、心遣いをしているのを見て“S A Aはああいうことをするのかあ”と思いました。

ニコニコと親切で、しかも毅然たる態度で会場を監督するS A Aは、何といっても国際協議会のS A Aの右に出るものはなかったように思います。これもS A Aのあるべき姿を見せたものでありましょう。要するにロータリークラブ全体が教育的な、しかも暖かい善意に満ちた雰囲気になっていなければならないということです。

S A A・親睦・情報各委員会等が、常に会長との連携のもとにそのような雰囲気作りをするべきだと思います。昔のロータリーは確かにそのような雰囲気があったように思います。「君は入会して半年くらいにはなるかね。」と語りかけられ、「少しは慣れたかい。欠席はまだしていないだろうね。メーカーのしかたは知ってる？」などと話しかけられたり、欠席をしたら早速幹事と出席委員長から電話があり、「今日は来なかったねえ、いや、ちょっと話したいことがあったんだけどな。」とか必ず電話をもらったものです。

“あの時分は皆が力を合わせて新会員の

世話をしていたものだなあ”と思ひ出します。初めて地区に出たときは、他クラブのいろいろな人にお目に掛かり本当に勉強になったものです。「君、こういうことを知っているかい。」とか「いや、今に分かるよ。クラブにさえ出席していればきっと今に分かるさ。」と言う言葉をよく聞きました。

そうした言葉はクラブに必ず教育的雰囲気があるのだという前提があり、自信があるから言える言葉だと思います。薫陶という言葉があります。辞書には徳の力で人を教化することとあります。いちいち手を取って教えなくとも、その人のそばにただいていつの間にか教化されることです。

その逆の朱に交われば赤くなるのでは困りますが、習う側から薫陶を受けるのを薫習というのだそうです。その人のそばにいて自然に会得することだそうです。ロータリークラブそのものの中にこのような教育的な雰囲気があって欲しいものです。ロータリークラブの中で非常に大切なことは雰囲気です。

何となく明るく親しみやすく、仲間意識もあり、しかし、開放的なものも感じられ、相手の話をよく聞く寛容さも感じられる。そして若い人達に対しては教育的な雰囲気をもっている、そんなクラブを目指したいものです。

今は更に新会員の教育プログラムが開発され、ベテランロータリアンが1人ずつ新会員の教育係として任命されるようになった由で、本年度は当地区の丸山宏パストガバナーが、国際ロータリーのゾーンの新会員の教育についてのコーディネーターの大役についておられ、各地を飛び歩いておられます。

ところで話は違いますが、こういうことがありました。あるロータリーでない会合でいきなり司会者が「今日ここでショートスピーチを〇〇さんをお願いしてあったのですが、その方がご欠席になったので、突然ではありますが、ここにロータリーの方が来ておられますので、ロータリーとはどういう団体なの

か、皆、実のところあまり良く知らないのでは、簡単に5～6分で話をさせていただきませんか。」と言われました。

既にガバナーを終えたばかりの時でしたので、突然で用意はないけれどたいしたことはないと思ひ話し始めましたが、ふと相手が非ロータリアンだと思った途端言葉が出なくなり大変困りました。つまり我々は、ロータリー語とでも言える専門用語で話しているのですが、一般の人々に、しかも5～6分で要点だけを語ることの難しさをつくづく感じ、また自分が如何にロータリーの知識が、本当のところまだまだ浅いということに嫌というほど知らされた思ひが致しました。

ある時、元R I会長のケラーさんと同じ車に乗ることがありました。その時いただいた名刺のうらには、5行程120～130字位でロータリーとはということが書いてありました。「どうかねこれは。よい試みとは思わぬか」と言われました。せめて5～6分の短い言葉で家族や友人などに「ロータリーとは」を語る自分なりの言葉を用意しておいて戴きたいものです。自分の勉強にもなります。各クラブで皆で試みてみてはいかがでしょうか。

次に広報についてお話をさせて戴きます。ロータリーの広報は、最も皆が不得意とするところで、ロータリーの奉仕活動の中でも最も軽視されていた部分でありましょう。我々は基本的に「隠れたる善行の美德」という観念と、ロータリーの奉仕活動をPRすることに対する躊躇があります。しかし、今の社会は地域の人々の十分な理解がなくては、地域社会に対する有効な奉仕活動は難しい事でありまして。

勿論、奉仕者としての研鑽と、職業を通じての奉仕はロータリーの本分で、これに広報をいらないと言われればその通りであります。ロータリーの奉仕活動はそれだけで済む問題ではありません。今後はロータリーとコミュニティとの双方向型のリレーションシッ

プが大切であると指摘したいと思います。

新しい時代のあらゆる奉仕活動は、コミュニティとの関連においてその価値が問われてくる時代になると思います。地域社会自体もまた行政も地域社会のロータリーを含む多くの奉仕団体との連携を大いに考えなければならなくなっています。ポリオプラス運動など最も良い例と言えるでしょう。地域社会とロータリーは「と」の関係ではなく「の」の関係にならなければなりません。ロータリー“の”地域社会であり、地域社会“の”ロータリーにならなくてはなりません。

これを進めて考えてゆくと、言い換えればロータリーは地域社会にしっかりとした足が地に着いた奉仕活動をし、地域社会に市民権を得なければならないと言うことであります。そしてロータリーの奉仕活動が地域社会と共に行われることも多くなるでしょう。“それは行政が行うことで、ロータリーのすることではない”とよく言われることがあります。

たしかにそういうことはありますが、もっと一体感を持たなければならないということではないでしょうか。今後のロータリーの問題としてこの辺は一考すべきだと思います。以上、時間ですので終わります。ご静聴を感謝致します。(拍手)

(司 会) 秋山様、大変貴重なお話ありがとうございました。土田分区代理よりお礼の言葉がございます。

(土田東分区代理) それでは、一言お礼の言葉を述べさせていただきます。ただいまは、秋山バスターガバナーより「今日のロータリーを知ろう」という題に相応しい、そして基本的なこと、そしてまた、わかりやすく大切なことを教えていただきました。本当にありがとうございました。これからのパネルディスカッションに大変参考になります。本日は、本当にありがとうございました。(拍手)